

サバティカル雑感

大塚 祚 保

04年前期に、思いがけずにサバティカルを得た。イギリスへの留学（1996年度）につぐ長期の休暇であった。有効に過ごさなければならない。そこで2つの目標を設定した。1つは、単著の刊行。2つは、イギリス旅行。

1. 本の刊行

『都市政策試論』を6月に刊行した。5年に1冊を目標に刊行してきたが、その4冊目の単著である。3冊目の『イギリスの地方政府』（流通経済大出版会）では、博士号を取得した。『都市政策試論』（公人社）は、ここ4～5年に書いた論文をまとめたものである。本の刊行は、十分に満足いく内容とはならないが、時期をのがすとさらに遅れるために、不十分さは次の刊行にゆだねる、との思いでいつも刊行してきた。

その内容は、第1部まちづくり、第2部住民と自治体、第3部都市政策の展望の3部構成である。第1部は、都市政策やまちづくりを中心として、地域開発や公共事業による経済開発のあり方を問うものである。

第1章 都市政策の流れと展望

第2章 全国総合開発計画と都市政策

第3章 リゾート開発の問題性

第4章 まちづくりと地域振興

第5章 市民主体のまちづくり

第2部は、市民生活と自治体をめぐる問題で、自治会、町内会を通じて行われる地域社会のしくみを分析したものである。

第6章 市民参加と自治体

第7章 NPO活動と自治会・町内会

第8章 住民自治と区長制度

第9章 イギリスのパリッシュ・カウンシル

第3部は、新しい都市政策の動向と展望をめざしたものである。

第10章 高齢型社会の動向と展望

第11章 情報公開制度の動向

第12章 市町村合併を考える

第13章 イギリスの地方政府

表紙には、マッターホルン（スイス）の写真を入れた。スイス旅行の際に撮ったもので、右の突起の根元にあるマッターホルン・ヒュッテ（クライマーの登山基地）に登ったときのものである。マッターホルンの姿が、天候にめぐまれ良くとれたので気に入った写真の一つであった。

2. イギリス旅行

04年9月に10日間のイギリス旅行を妻と行った。留学以来、すでに5～6回となり、イギリスの主なる都市は行ったことになる。ロンドン3日、ウインダミア3日、エジンバラ3日の個人旅行である。BT（British Train）とバスによる自由な旅であるが、そこで気のついたことをまとめてみた。

○成田にて

9月に入ってからの成田である。いろいろとチェックがきびしい。ヴァージン航空のスタートは、1時間も遅れた。「9.11」に向けてのきびしい対策らしい。一つの手続きにピリピリしているようだ。何をするにも時間がかかり列ができる。

ロンドンでは、入国審査に約1時間を要した。平生は形式的なものであったと思うのだが。ちなみに出国審査もきびしく、出発の3時間前に来るように言われ、実質4時間を要した。帰りは、ヒースロー発9月12日であったので、一層きびしいチェックが行われていた。何の手続きにも行列ができる。「9.11」への各国の対応は、予想以上であった。

○機内にて

成田からロンドンまで、約12時間かかる。その間、我々は、夕・昼・朝の3食とビール、ワイン、水などを口に入れる。にもかかわらず、機内では運動スペースはなく、全然運動はできない。唯一の運動できそうな空間は、トイレの中である。

トイレは、大と小をするだけでなく顔や手を洗い、さらに、手や足を動かし、運動する唯一のスペースである。機内に運動するスペースが欲しい。スチワードスの働くキッチン・スペースは貴重な運動スペースの一つともなる。ヴァージンでは、前方のファーストクラスにカウンターバーらしきスペースを設置した。乗客からのニーズの現れであろう。12時間の機内は、上のように食べ、運動なしの状態であり、太るのは当たり前だ。機内では贅沢かも知れないが、スペースが欲しい。

○マナー

となりの窓側の学者風のジージは、窓を開けっぱなしに本を読んでいる。すると、暗いところに光が刺すように目に入り、まぶしい。ねむい人には、

迷惑そのものだ。直接に言うとはトラブルになるので、スチワードに注意してもらおう。ブツブツいろいろと言いつを言っていたが、しぶしぶ閉めた。皆が暗くしているのに、自分勝手なマナーに欠ける。私もジージの仲間入りの年齢であり、要注意なり。

○Wデッカーの旅

ヒースローからラッセルスクウェアのホテルまで、地下鉄の事故（不通）のためにバスで行くことになった。1人8ポンドと地下鉄（3.8ポンド）の2倍である。しかし、景色は良く、2階バスからロンドンの街並みを見ることができた。ビルの街並みの間に、ケンジントンパーク、リージェントパークなどの緑多い公園がある。なつかしいロンドンの風景である。イギリスの赤レンガの街並みが、だんだんと記憶にもどってきた。イギリスに来たのだと実感した。

ユーストンから湖水地方のウィンダミアまで、4時間余のBTの旅を予定した。しかし土曜日の改修工事とのことで、途中のヘンプステードからノーザンプトンの2時間半余をバス代替輸送になり、再びWデッカーに乗ることになった。今度は2階バスの前方からイギリスの田園地帯を見ることになる。広々とした、ゆったりとしたスケールの大きい田舎である。ゆるやかな丘に、広い畑、農場が広がり、牛、馬、羊が草を食べるファームが多い。田舎は広く、緑豊かであった。

この2つの事件は、イギリスの交通事情の実態のようで、めずらしいことではないという。BTや地下鉄が事故などで遅れ、不通となり、バスで代替する、あるいは遅れをただ待つしかないという目にはよくあうのである。

3. 湖水地方 (Lake District)

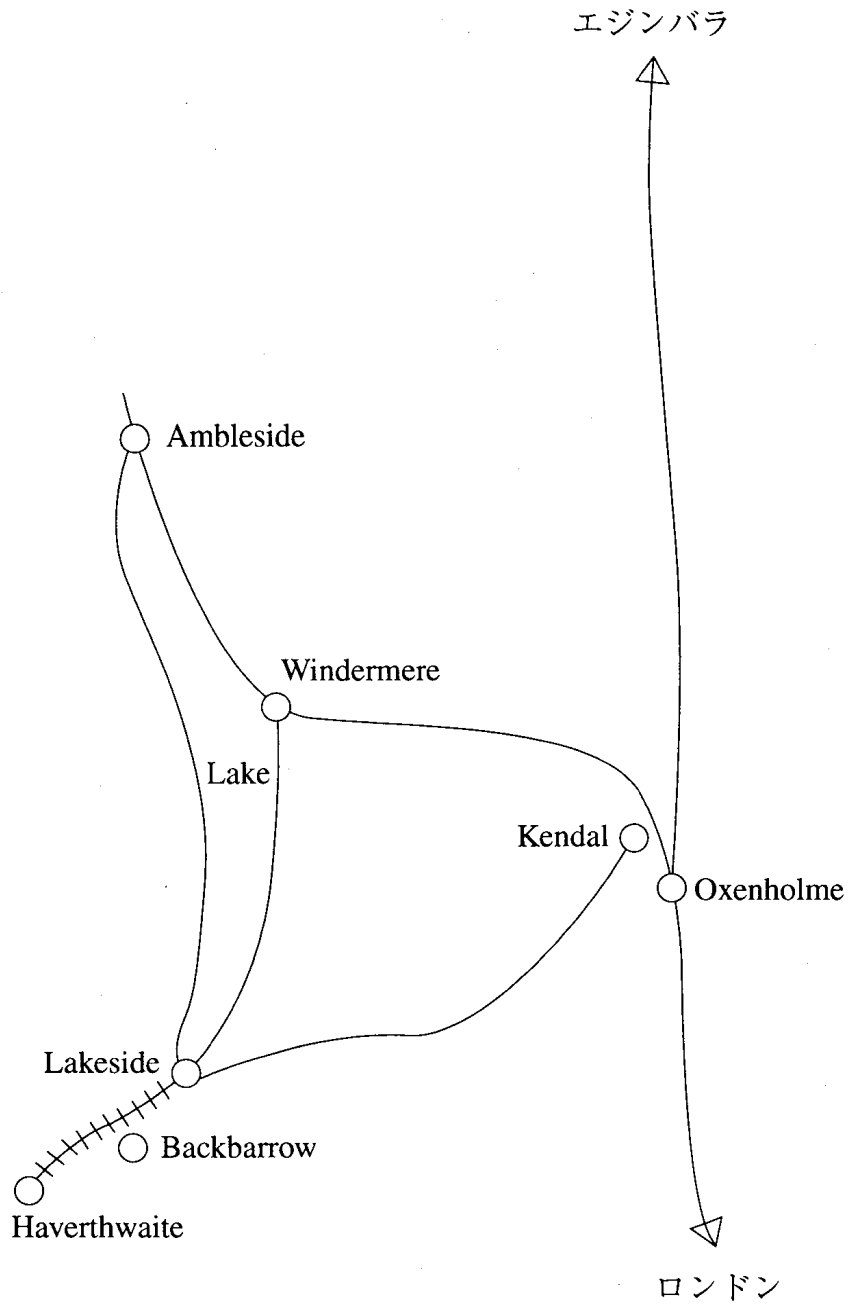
ウインダミアを中心とする周辺地域は、湖水地方といわれ、湖と山々が点在した美しい自然地域である。とくに山の少ないイギリス国内では、その豊富な湖と山の自然に魅せられ、貴重な観光地、リゾート地として多くの観光客が訪れる。我々の泊まったホテルは、ウインダミアからさらに南部のバックバロウという山の中にあった。ホテルからは直通のバスがなく、ハーバースウェイトから蒸気機関車 (Steamer)、レイクサイドから船に乗って1時間半余でウインダミアに着くというところであった。

スティーマーは、18分余の距離を1日6往復 (10時～6時) しており、観光客を中心に周辺の村人も利用する交通施設であった。石炭の煙をモクモクと走る姿は、昔なつかしいノスタルジアをただよわせていた。観光客は、このモクモクと走る勇姿を求めて乗車している。しかし、村人の中には、自転車の人、犬をつれた人、車イスの人、乳母車の人なども多く、スティーマーと船は、現在でも人々の日常の足として立派に機能していた。

ウインダミア湖を1時間余の船旅で楽しむ。細長くきれいな湖には、白鳥、カモ、バン、カモメなどの鳥が多く、船、ヨットなどの港もある。船からは、美しい丘と羊、牛のいる牧場、家、別荘、ホテルなどが見えるが、豊かな自然と美しい景色の中にある。きびしく自然保護された観光地、リゾート地であることがわかる。

この地方の家は、白いスレート状の石の屋根とカベをもつ。その石は、家の境や畑の境、さらに羊や牛を囲うヘイにも使用されている。近くに石のスレートを産出する鉱山があるらしく、村人の生活を支える基盤となっている。かくして、この地域の家々は、白い石の家並みであった。この白い家並みは、グラスゴー、エジンバラへと続きスコットランド地方の街並みの特色をなしている。ちなみにロンドンなど南部のイングランドは、赤レンガの赤い街並みである。

Lake District



○フットパス

この地域には、村と村をつなぐ歩道としてのPublic footpathがある。フットパスは、広大な個人の私有地を出し合い共有したもので、誰もが

Publicに通行できるようにした歩行路である。現在のフットパスは、人のみの歩ける道として、村と村をつなぐ、観光施設をつなぐ、自然の中をめぐり、ファームや峠、頂上へとつなぐ、などのいろいろな用途で使われている。日本でいえば、旧道、古道といわれるもので、人一人が通れる程の細い道である。

ホテルから川沿いを歩きながら、フットパスを見つけてはその方向へと歩いていく。どんどん行くと村を見下ろせる丘に出た。そこで一休みしていると、村人が犬をつれて散歩にきた。さらに上に行くと峠に出そうであったが、方向がホテルとはズレそうなので、そこで引き返した。石の柵の間に木のゲートがあったが、どうやら羊や牛を牧草地につれていき放牧するが、下の人家の方に下りないようにするためのものらしい。

丘を見ると、川の右左で大きく異なっている。南側の斜面は、頂上まで草原であり牧草地であった。陽あたりの良い南側は、羊や牛の放牧として木々を刈り牧草地としていたのである。羊が丘の頂上ちかくに登りエサを食べている姿をよく見るが、このためであろう。これに対して、北側の斜面は、緑多く高い木々がしげっている。南側の、本来、緑多い木々の丘は、羊の放牧のために、さらに羊がエサとして食べるために、木が育たずに放牧地となったのであろうか。いずれにしろフットパスは、村人の生活のための路として現役であった。

○バスとまちづくり

バックバロウのホテルからケンダルまでの約1時間をバスにのった。内陸部での田舎（村）をずーと通過したことになる。そこには、緑多く豊かな田園が広がっていた。なだらかな丘陵地域には、畑が広がり、牧草地には、羊、牛の放牧が行われていた。家や畑の境は、ほとんどが石のスレートであった。イギリスの田舎は、豊かでのんびりとした農村地帯であった。

ケンダルのバスターミナルとBTの駅の間には距離があり、歩けば5

分余かかる。イギリスの多くの都市では、バスターミナルの周辺にスーパーなどの店があり、中心市街地が広がる、タウンセンターである。ところがBT駅 (Stasion) は、少しはなれたところにあり、いわゆる分散方式のまちづくりである。駅周辺には、商店は少く、むしろ駅舎に売店があるのみである。駅では乗車券を買うのみで、下車のチェックはほとんどない。従って、駅員も少なくてよい。切符のチェックは、車内で駅毎に乗車する人 (座席) に車掌が回りチェックしていく。

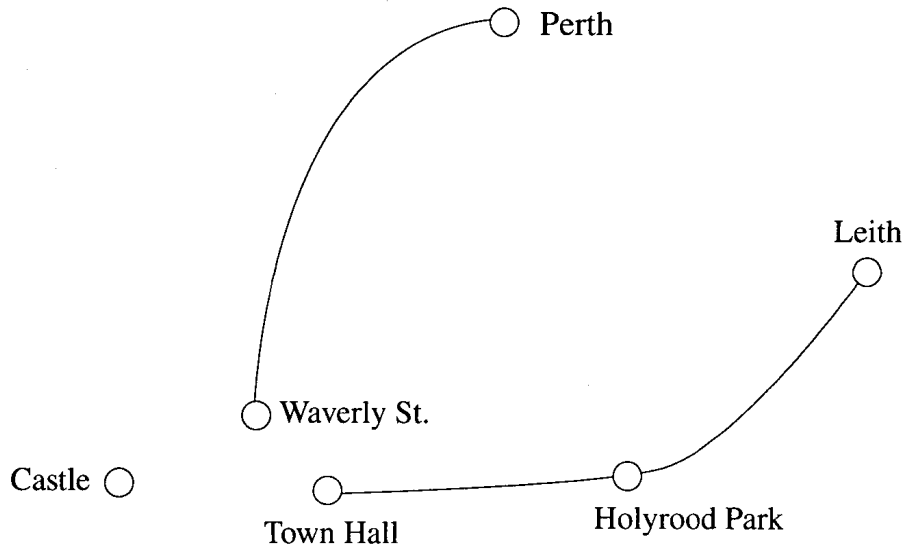
日本の場合、駅を中心にバスターミナル、商店街などができ、街のセンターとなって街づくりが行われる。集中方式によるまちづくりである。BT駅は、地下鉄駅ともはなれているケースが多い。ロンドンなどの大都市では集中しているが、むしろ例外といえよう。イギリスのまちづくりは、分散方式であり、日本の集中方式との違いである。どちらがベターかは即断できないが、過密を防ぐためには、分散方式が有効であろう。

4. エジンバラの街

エジンバラの中心街を歩く。まずエジンバラ城。3時間余をかけてゆっくりと見学。すでに一度きたことがあったが、十分に時間がとれなかったためである。つぎに気になったのは、Holyrood Parkである。エジンバラ城につぐ二つ目の丘である。小高い丘のピークまで登ると、市内が一望できる。夕日が美しい。

旧市街地の中心にタウンホール (エジンバラ市役所) はあった。由緒ある歴史的建物であり、中に入って資料をもらう。つぎにスコットランド省 (Scottish Parliament) を見つけたがなかなかない。何と9月から新設オープンしたばかりであったために、誰に聞いても分からずに捜し回った。やっと見つけた省の建物は、Holyrood Parkの下で、ホリールート宮殿の前にあり、新しい超モダンな建物 (芸術的デザインを加えた) であった。

エジンバラとその周辺



ブレアーの行政改革によって新設されたこともあり、その新鮮さをアピールするために、どうみても周辺の建物とは似合わない超モダンな建物となったのであろう。

○リース (Leith) 港

ホテルから1時間余を散歩した。周辺は高級住宅の一角という高台であった。ひときわ高くそびえる教会のような建物が見えたのでそこを目指して歩く。地元のカレッジであった。由緒ある旧領主の館のような建物には、100メートル余の真直ぐな道路があり、日本での寺社へと続く参道のようなスタイルであった。

近くには広い公園があり、広い芝生が広がる。park, greenが広い。若い子供づれ(乳母車)の主婦、高齢者の散歩(犬をつれる)などの市民が多い。他には、白鳥、カモ、ハトなどの鳥が多い。エサをやるととんでくる。白鳥は白くてかわいいが、大きいので強い。パンがなくなると、さいそくのために人間に迫ってくる。その迫力は、恐ろしいほど強く大きい。

美しいだけでなく強く大きく、正に鳥の王者である。

リース川沿いのウォーキングウェイをリース港まで2時間かけて歩く。この道は、フットパスのようであったが狭くて汚い。都市部でのフットパスは、十分に管理されず、ゴミの多いところがあるので要注意である。

リースはエジンバラの貿易港であり、産業都市、港まちであったが、街そのものは余りきれいではなく、観光客も少ない。貿易港として、エジンバラの産業や経済、いわゆる台所の役割を果たしているものといえる。

○パース宮殿 (Perth Palace)

エジンバラから電車で1時間余にパースがある。人口3万5千人余のスコットランドの首都であった古都である。その郊外にパースパレスがあった。旧スコットランド領主の宮殿は、王位継承の“運命の石”のあった歴史的建物である。何としても広い庭がすばらしい。広い芝生、大木の森、イングリッシュガーデンなどのすべてが、この宮殿の中にある。森を歩いていると野生の小鹿が出てきた。森はそれほど広大で豊かであった。周辺にはのどかな田園風景が広がっている。

○ロールの風物誌

パースへの1時間半、車窓からは、広大な田園と海の景色が見られた。畑では、たくさんの大きなロールが並んでいる。小麦や草を刈りロール状に巻いたもので、ほし草として羊や牛、馬の冬季のエサとするのであろう。乾燥させ、ほどよくなった頃に収穫するのである。ロールは、一つが人間ぐらいの高さであり、広大な畑に無数に並んでいる。夕陽を受けて影をつくり、一層に大きくみえるロールは、この地方の風物であろう。絵になる風景である。

5. イギリス人の親切さ

ヘタな英語で歩く個人旅行には、いくつかのトラブルが生じる。その際、多くの人々からのヘルプを受けることになる。

ウィンダミア湖では、船を間違え、別の方向に行ってしまった。その際、船員は、“No problem, I help you” と、そこで待っているという。終点の Ambleside につき、そのままUターンして始点のLakesideについた。そこで彼は船の掃除をして一日の作業を終え、帰宅する。そしてマイカーで我々を20分余のホテルまで送ってくれた。そうでなければ、1時間以上の暗い道を歩くことになったのである。ただ感謝しかなかった。車中での彼の話では、日本に友人がいて東京から京都まで旅行したことがあるという。それにしても親切であった。

オックスフォードでは、バスセンターからのバスでStasion下車を見落とし、5つ余先の駅になって気がついた。そこで急拠降りると、一人の主婦が下車した。彼女は、一度、自分の家の方に行ったが、しばらくして、またもどって来て、May I help you という。バス停と時間を見て、またいなくなり、そして車で駅まで乗せていってくれるという。夫が運転し子供が同乗していた。なぜ、こうも親切なのか。日本では考えられない。車中で聞くと、彼女の兄は、日本人妻と世田谷に住んでいるという。それにしても親切をさりげなくしてくれるのがうれしい。日本で、我々は、外国人にこうしたもてなしができるであろうか。

オックスフォードからロンドンへと電車で帰る。ところが時間がなく、停まっている電車にとび乗った。ちょっとした油断がトラブルの原因となる。電車は1時間を過ぎてもロンドンに着かない。それに外の景色が田舎の畑、みどりで、ロンドンに向かうムードではない。しかも、運悪く、日曜日のためか、車掌も来ない。そのうちに2時間余たちおかしいと思っ

いるところにSouthamptonに着くことが分かった。

本で見ると西海岸の方に行っていることがわかり、そこでアジア系の青年にロンドンに行きたいという。彼は、我々と一緒に下車し、別のホームまで案内し、次のWaterloo行きの電車を確認し、この車に乗れという。そして自分は、元のホームにもどり、次の電車を待っていた。我々のために、電車を遅らせたのである。感謝、親切である。日本の青年はどうであろうかと自問すると、親切さがさらに身にしみる。